

寒燈吟（水巴選）

樹々凍てて落す葉もなき夜明かな
埋火に客去りて頬を温めけり

（2月2日）

吟社三月例会 席題「梅」

水源探查梅咲く谷に昼餉かな

句 帖

野の兵に菓子かくれ売る霞かな
樞鳥が落す木の実も植えにけり

句 帖

恋猫のいつ戻りゐし机辺かな
暮る、まの餘花に庭踏む草履かな
短夜や籠に飼わるる鴉の子
夕日はげしく椎に暮れたり浴衣きる

（曲水3-1）

春の月（鬼城選）

春の月年古りし門の槐かな
春の月の暗がりに捨つ産湯かな

悼 句（省亭画伯追悼句会）

香煙の花鳥ともなれ五月雨

（曲水3-2）

席題「餘花」（〆）

山の湯の餘花に袷を著初めたり

吟社六月例会 席題「梅雨、時鳥」

夜もすがら梅雨の水車の灯かな

一月三十一日 青木幸太郎宛 海野長頸子

先日はあんな端書を差上げて置きながら樹人氏の会へは不参してしまつて何とも申訳ありません。多分苔雨君はゆかれて賑かに御句作なされた事と存じます。あの頃以来、僕は風邪の熱やら歯痛のなやみやらでずっと弱つてをります。ところで明後日の寒燈会は勝手ながら私の宅で催したいと存じます、何とぞ御都合なすつて御出席のことを願ひます、樹人君苔雨君へも同時に知せて置きますさよなら

三月三十一日深更 青木幸太郎宛 長頸子

昨晩は早速の御光来を重ね／＼の失礼何とも御詫の申上やうもなく候御詫は今度御目にかゝりし時のこと、して、実は曲水俳句鈔の仕事もまづ／＼一昨晩にて一段となり候へば小生も明日あたり一寸帰郷いたすべく存じをり候ところ本日また／＼先生よりの急用との御手紙にて伺ひしところ、兼てからの大先生の御病氣、昨晩あたりより急に重りて先生も令妹も三筋町の方へ趣かれをる次第にて小生も三筋町の方へ伺つて御用を聞き更に浜町へ戻りて仕事をいたすやうなわけにて、目下のところでは大先生の御容体は殆んど危篤に近き状態にてまことに心掛りの有様に御座候。御病症は黄疽の由なれど心臓弱られをり候由非常に憂慮いたされ候、そんなわけにて先生も露女様もここ四五日は三筋町の方へ詰切りの由に候。先はおわびながら御しらせまで